

忘れ得ぬ名歌・辞世歌（四）

古藤田 太

（会員 弥生町江良）

の辞世の歌碑があった。

（2）竹田報告隊 高崎善右衛門

ふりかえり見れば涙の特雨にて

おぼろに見ゆる君のやかたは

（1）吉田松陰

親思ふこころにまさる親心

けふの音づれ何ときくらむ

安政大獄の進行にともない再び松陰は伝馬町の獄舎に送られた。松陰の死は免がれ難くなり、安政六年十月二七日、多くの門人に遺書を認め終ると、獄舎の裏庭に引き出され首斬り浅右衛門の三尺の野太刀によって断首された。

松陰が教育に励んだのは僅か一年にすぎなかったが、久坂玄瑞・高杉晋作・伊藤博文・山県有朋・品川弥二郎・山田顕義・前原一誠ら明治維新の原動力となった多くの人材を薫陶したことは周知の通りである。萩に松陰

善右衛門は天保九年玉来町に生れた。文久二年三月小河一敏等と王事に尽し、京坂に至りて義拳を企て同年八月、勲感状を賜った。

明治十年西南戦争に於ては、西郷隆盛の徳を推賞して奇兵隊の竹田侵入に当たって、その輜重部隊員として従軍、薩軍利あらず敗走中岡城を眺めやつの歌。

（3）名将山田有信を讃える歌

はすの葉におきこばしたる露の玉

おわりや君がために捨てけん

九州統一を夢みる大友宗麟と、南九州を制圧して北上せんとする島津義久は日向国小丸川から耳川一帯で雌雄を決せんとしたのが天正六（一五七八）年の耳川の戦い

である。

大友宗麟はキリスト教を信仰し、日向の地に「日向天国」を夢みる戦でもあったといわれる。島津軍の要衝の地にある高城には島津の名将山田有信がわずか五百の兵をもって迎えたが、大友軍は昼夜の別なくこれを攻め立て、豊後から運んだ国崩の巨砲をもってしても高城は落ちなかった。

平地戦に移るや名貫川、耳川辺りまで大友島津の戦いは続き、白杵統景・吉岡鑑興・雄城播磨守・吉弘鑑宣・田北鎮周ら当時大友軍の重要人材がことごとく散華した。山田有信は敵味方の英霊を弔うため石碑を刻んだ。現在では貴重な文化財に指定されている。

天正十五年、秀吉は九州征伐の軍を起こしてこの高城を大兵をもって攻め立てたが落城さすことはできなかった。

時移り慶長十四（一六〇九）年六月十四日山田有信は六十才で死去し、国分の竜昌寺に葬ることになった。有信の人となりを知り敬服していた島津義弘はわざわざひつぎを隼人城の橋の近くまで迎え、義弘自ら焼香し、和歌一首を詠んで手向けられた。葬列に加わっていた新納

忠元が「うらやまし消えゆる玉のおわりまでいともかしこき君が言の葉」と詠んだという。

